

C-24 近世における農民の服飾美意識(第2報)越後縮に対する織女の場合
県立新潟女子短大 山崎光子

目的 近世における越後縮は、他の織物産地のような問屋制家内工業の形態に発展することなく、専ら農村の女性達によって個別に織られたものであるにもかかわらず、江戸を中心とする幅広い階層の人々の間に流通し着用されつづけた。その隆盛を支えてきたものは何であったのか、織女の心情に焦点をあて考察を試みた。

方法 史料としては「北越雪譜」「續麻録」「八瀬竈」等の記録類の他、奉掛などの遺物を用いた。

結果 縮織は積雪期に婦女がいたずらに日を過ぎないように始められたという。勿論かなりの現金収入は貴重だったが、せいぜい全く採算の合わない仕事であったのに、女達が農耕を放棄してまで、四季を通じて機織に専念するようになったのは、貧困や封建体制甘受のためとは考えられない。髪に油もつけず、鉄漿もつけず、布に付いた僅ばしみにさえ発狂することもある程、布織に心身をつりやした。そして、成果に則して相応の栄誉も得ることができた。当時の男性はそれを、結婚条件を有利にするための努力と酷評しているが、あながちそうとは云いきれない。越後縮がごく若い層の女のみには依存して成り立っていたわけではなく、縮に対する想には未既婚の差のなかったことは残存の史料からうかがえる。縮織発展の原動力は女達の自らの仕事に対する熱意であり、社会の底辺に生きてとされていいるその人々の方が、むしろ限られた範囲の中で自由に、主体的な意識を持って美的産物を創造していったことが推測される。